
M a g i r i c o

幼ゐこみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Magirico

【Nコード】

N1072M

【作者名】

幼ぬこみ

【あらすじ】

「どうか、さがさないで」
「どうか、みつけないで」
「どうか、とらえないで」
「どうか、ころさないで」

最高の力を得るために、払うものは何？

PROLOGUE

『どうか、さがさないでください。』

『どうか、みつけないでください。』

初めに聞こえたのは、そんな声だった。

『どうか、とらえないでください。』

『どうか、ころさないでください。』

哀願する声。その声を耳に出来たのは、わたしだけではなく、わたしの半身も同じだった。

『みちびかれしもの、このこえをきくもの、ただしくすすむべきものの。』

いまよりそのものに、《無》をさすけよう』

幼い声。少女のような声。だけど、その声から受ける印象は、もっともつと深く、海のように、大地のように、聞く者を包み込んでいくような、大きなものだった。

『だから、さがさないでください。』

みつけないでください。』

とらえないでください。』

ころさないでください。』

声が声とぶつかり、空中で分解する。それを聞くわたしと、わたしの半身の心は、すっかり囚われてしまっていた。

『それだけをやくそくすると』

わたしの半身が、寄り添う。

わたしはその頭に軽く手を添えた。

『ちかつて』

光がわたし達を包んでいく。全てがわたし達を囲み、全てがわたし達に入り込んでいく。そして、これは、これから先、ずっと先、死ぬまで、わたし達の身体から抜け出すことはないだろう。

それだけの、光。それだけの、力。

《無》がわたし達に宿るその瞬間。

『ちかつて』

幼い声は、どんな表情で、わたし達を見ているのだろう。

MONOLOGUE【1】カジカ

1 カジカ

それはきつと運の悪い事故に近いものだと思う。

自分も悪くないし、相手も悪くない。自分を取り巻く環境も悪くないし、相手を取り巻く環境も悪くない。ただただ、運が悪かったというそれだけ。恨むべくは、神とでもいべきだろうか。くだらない。誰も恨むべき者なんていない。

だから、持ち手の壊れたバッグを抱えながら、半ベソで荷物を拾っているのが、昔のクラスメイトだったという事もただの偶然だし、それを助けてから、話の流れで連絡を取り合うようになったのも、別に深い意味はなかった。

ただ、後悔するとしたら、《妖精》と言われている存在に興味があったという下心から、彼女に近づいたという所もあったことだろう。

わたしはこの世に溢れている《人間》であるし、《妖精》や《魔女》、《魔物》とか言われている類の者は知っていたけれど、仲良くなったことはあまりなかった。《人間》は《人間》の中で暮らせばいいのだ、という世間の空気に逆らえなかったこともあるし、彼らの方が、特定の《人間》にしか心を開かないという事もあった。町中で仲良くなる犬猫なども、心を覗けば《人間》しかない。つまり、わたしは、《人間》以外には懷かれないのだろう。そう思っていた。

だから、荷物を拾ってあげただけで、こんなにも一人の《妖精》に懷かれるなんて、信じられなかった。思えば、彼女だって、《人間》の溢れるこの世界で暮らしているのだ。彼女の人脈の中に、《人間》が居ないなんて事はない。彼女が仲良くしている動物たちも《人間》がいないなんて事はない。所詮、《妖精》というものは、

ちよつとしたことで様々な者に心を開く生き物なのだ。

それでも、わたしは嬉しかった。

《妖精》の彼女が、人脈の中の決して多くはない《人間》の中に、わたしを含めてくれたこと。また、今日も、わたしに連絡をくれたこと。遊ぼう、と言声をかけてくれたことが、嬉しかった。

きっと、彼女は気付いていないだろう。

わたしがこんなにも、彼女のことを愛していることを。

EPISODE【1】待ち合せ

1 .

「待ったかな？」

現れるなり、キズキはそう訊いた。いつだって同じ。相手よりも少しでも遅くなれば、いつもキズキは不安になる。だから、おずおずと訊ねるのが当たり前となっていた。一方、カジカはいつも遅れない。キズキよりも先にいつも来ている。だから、ますますキズキは不安になる。

「まさか」

それでも、カジカが笑ってそう答えるのは当たり前だった。何故なら、まだ、約束の時間にもなっていないのだから。そうと分かっている、キズキはおずおずとしてしまう。そういう性格だった。カジカはそれを分かっている。だから、敢えて何も言わず、キズキの手を引っ張っては、この時間を終わらせるのだった。

「さあ、行こう。今日はちよつと忙しいんでしよう？」

優しく問いかけるカジカに、キズキは頷く。

二人がいるのは、街。街といっても、町自体、規模が小さいから、街も大都会に比べたら小さい。でも、このあたりではたしかに栄えていたし、ここに来れば大抵のものは手に入ると言ってもよかった。カジカとキズキがここに来る時は、大抵、誰かに何かを贈る時だった。

「今月は、たくさん、誕生日があるの」

キズキがちらりと見せる表情に、カジカは何も言わなかった。時期外れの《妖精》、そうキズキが言われているのをカジカが知ったのは、最近のこと。それまでは、ただのクラスメイトだったし、決して表面化しない《妖精》間の事なんて、カジカが知るわけもない。

ただし、時期と行ってもそれは大まかなもので、キズキが気にするようなことではないのだが、なにぶん、待ち合せ前にも関わらず、相手が先にいるだけでおずおずするような娘だ。時期外れということに拘らないわけがない。

「皆が喜ぶのって、なんだろう？」

キズキがふうと息を吐く。

「わたしには想像もつかないなあ」

カジカはくすりと笑んでみせた。カジカは《人間》、キズキは《妖精》。同じヒトでも、心の種類が違えば、全く違う生き物のようだ。カジカにとって、キズキは初めて懐いてくれた《妖精》だから、知らない事だらけだ。元クラスメイトでも、仲良くならなければ全くの未知。この数カ月で、カジカはそれを思い知らされた。

「とにかく、行ってみようよ」

キズキの手を取って、カジカは歩み出した。

EPISODE【2】買い物へ

2.

街の賑わいは、カジカにとっては心躍るものだった。

様々な色合いが目飛び込み、自分を飽きさせないこの街の変化が、カジカは好きだった。キズキはこの街を、どう思っているのだろう。カジカはふとそう思う事があつたけれど、キズキに訪ねようと思う度に、キズキにペースを乱されてばかり。

キズキの手を引つ張っていたはずなのに、いつの間にか、キズキに手を引つ張られていた。

「ねー早くー」

いつの間にか、キズキのあのおずおずとした様子もなくなっていた。

キズキに引つ張られて、カジカは街を進んでいく。色という色が、カジカの目に映り込む。キズキの目には、入っているのだろうか。立ち止まろうともせずに進んでいくキズキ。どうして彼女は、こんなにも急いでいるのだろうか。

「カジカ、どうしたの？」

不意に、キズキが覗きこんできて、カジカは我に返った。

街にあふれる色に中てられていたのかもしれない。思考がぼんやりとしていた。色という色が溢れていて、カジカの視界をぼかしている。

「なんでもないよ」

カジカは首を振った。

キズキは不思議そうに首を傾げたけれど、特に気に留めなかったようだった。再び前を向いて、わくわくとした様子で周囲を見渡している。彼女がわくわくしているのは、なんでだろう。カジカのよ

うな理由なのか、そうでないのか。カジカは少し気になった。

「ねえ、どこにいったらいいかな？」

キズキの言葉に、カジカは苦笑した。

「君の買い物に付き合ってるんだよ」

《妖精》が何を好むかなんて、カジカには分からない。それでも、キズキには悪気はない。発言の八割は、何も考えないで放っているのだから。

「あ、そうか」

キズキは笑いながら言った。

EPISODE【3】夕暮れに

3 .

キズキは何を考えているのか分かりにくいタイプの者だ。

とはいえ、カジカは《人間》とばかり接してきたから、それ以外の者の心なんて想像もつかない。《妖精》というものは、そんなもののかもしれない。どちらにしても、カジカにとって、キズキが扱いにくいタイプであるという事に変わりはない。

始めはどうなる事かと思われたキズキの買い物だったけれど、それなりのテンポでキズキは買い物を済ませていく。《妖精》は生まれる時期があるというけれど、本当にそのようだった。時期外れのキズキだけがその中から外れるというのが少し可哀そうなくらい、今月、キズキが贈り物をする相手は多いようだった。

荷物が多くなるにつれて、キズキは時折寂しそうに宙を見ていた。そういう時、カジカにはどうすればいいのか分からなかったけれど、握ってくる手の力にはしっかりと応えていた。

「ねえ、カジカ」

別れ際になって、キズキは呟いた。

「どうして、誕生日って嬉しいんだろう？」

キズキはたまにそんな事を呟く。気取っているというわけでもなく、ただ純粹に、疑問に思う事があるらしい。もしかしたら、彼女の成長は、非常にゆっくりなのかもしれない。カジカはそう思っていた。

「自分が生まれたことを祝ってもらえるから、じゃないかな？」

カジカは答えた。ひねらずに考えて、普通に出てくると思っている答え。でも、キズキは不思議そうにカジカを見つめると、また宙をじっと見上げた。

「じゃあ、祝ってもらえない人は、誕生日ってどう思ってるんだろ
うね」

どうして彼女がそう言ったのか分からなかった。

けれど、そんなキズキの様子を見ていて、カジカは少しだけ不安
になった。キズキが消えてしまうように見えたからだ。カジカには
到底理解できないだろう悲しみを抱えて、キズキが自分の前から、
消えてしまうような気がしたからだ。

だから、カジカが訊ねたのも、別に唐突なことではなかった。

「ねえ、キズキ」

カジカにとっては、自然なことだった。

MONOLOGUE【2】キズキ

2 キズキ

だって、彼女しかいなかった。

確かに彼女は《人間》だ。普通、相手は《人間》でないと分かっていたけれど、彼女以外考えられなかった。勿論、巻き込むことは承知していた。出来れば巻き込みたくないとも思った。けれど、あたしは《妖精》だから、どうしても、誰かを選ばなきゃならなかった。だとしたら、あたしの選べる相手なんて、選択肢なんて、存在しなかった。

だから、彼女しかいなかった。

古くからの友人でもなく、恋人でもなく、きょうだいでも、親戚でもない。数ヶ月前に、たまたま再会した元クラスメイト。クラスメイトだった時は気付かなかった。けれど、再び会った時から、段々と少しずつ、気付いていった。

なんで、前は気付かなかったのだろう。

いや、もしかしたら、気付いていたかもしれない。気付いていたからこそ、彼女に近づけなかったのかもしれない。彼女に近づけば、どうしても、どうしても、避けられなくなる。どうしても、どうしても、逃げられなくなる。だから、彼女には近づけなかった。

きつと、そう。

でも、彼女しかいなかった。

避けようとしても、ほんの数年避けられたとしても、いつかは直面することになる未来。そんな事、分かっている。分かっているつもりだった。だけど、分かっていたいなかった。

巻き込みたくない。本当は、巻き込みたくない。

巻き込まない方法を考えて、考えて、考えて。考えが見つかる前

に、彼女はまた、あたしの前に現れた。どうして、どうしてだろう。
あたしの避けた未来が、もう目の前に。

巻き込みたくない。巻き込みたくない。

だって、あたしは、彼女を愛しているから。

EPISODE【4】独りだけ

4 .

カジカと別れると、キズキはいつも気持ちが悪く塞ぎこむ。

本当はずっと一緒にいたいけれど、そうもいかない。カジカはカジカの、キズキはキズキの帰る場所があるのだから。その上、カジカがどう思っているかわからない。その事が、キズキの心を締め付ける。

キズキはいつも怯えていた。

もしもカジカに拒絶されてしまえば、自分のいる意味なんて、簡単に消されてしまうのだから。カジカに突き放されて、消えてしまう事がとても怖かった。だから、カジカと会って、別れるたびに、キズキの心は押し潰されそうになっていた。

そして、その日は、それがいつも以上だった。

——キズキ、わたしのこと、どう思ってる？

別れ際にそう言った、カジカ。

その表情が、キズキの脳裏に浮かんでは消え、浮かんでは消える。一人歩く夜道や美しく瞬く星達が、キズキを優しく包み込み、その柔らかな感触が、さらにキズキの涙腺を緩めていく。

カジカがどういふつもりでそう言ったのか、キズキには分からなかった。

——わたしのこと、どう思ってる？

キズキは答えられなかった。

自分の答えで、カジカがどう反応するかが分からなかったから。自分の答えで、カジカとの関係がどう変化するのかが分からなかったから。そして、勝手にカジカの心に絆を結んでしまった自分の行為が、明らかにやってしまうのが怖かったから。

だから、キズキは、こう言っしかなかった。

「なんで？」

涙でゆがんだ視界。星達がさらに輝いて見える。

「なんで、そういう事、訊くの？」

キズキは怖かった。

EPISODE【5】揺れる心

5 .

カジカと会って、別れば、必ず感じる孤独。

孤独からは避けられないと知っていても、やっぱりキズキはカジカと会うのが好きだった。一緒にいるだけで、とても楽しかった。楽しめば、楽しむほど、別れる時が辛いと分かっている、いや、分かっていたからこそ、キズキはたくさん笑う。

笑っているうちに、時間はあっという間に過ぎるけれど、この時間こそが、キズキにとっては貴重なものだった。こうしていると、避けられない未来から、少しでも遠ざかれているような気がしていた。それが違うとわかっていても、キズキのこの心は変えられなかった。

「カジカ、前にこんなこと聞いたね」

ある日、キズキはカジカに言った。心に残っていた質問。きつと気まぐれに訊ねてきただろうカジカの言葉。キズキの心にはずっと残っていた。

「あたし、カジカのこと、好きだよ」

キズキはさりげなく、応えた。カジカが風景に捉われている間に、そつと応えた。数日越しの返答。カジカがそれを把握できるわけではない。けれど、キズキはそれでよかった。

むしろ、そのほうがよかった。

カジカにこの声が届いたのか、届かなかったのか、結局キズキには分からなかったけれど、カジカはいつもと変わらない様子で、キズキの頭に手を置いた。

カジカの手の感触を味わいながら、キズキは少しずつ、カジカの心に勝手に結んでしまった絆を見つめ、その紐をさらに固く締めて

いくのだった。

「あたし、カジカのこと、好き」

今度は、自分に言い聞かせるように、キズキは呟いた。

風にかき消されるほどの小さな声。この声ならば、カジカに届くはずもなかった。

EPIISODE【6】静けき誓

6 .

キズキはいつか話さなければと思っていた。

でも、カジカと会う度に、勇気は衰退し、また次の機会にしようという心が植えつけられる。なぜなら、キズキは怖かった。勝手に絆を結んだキズキのことを、カジカはどう思うのだろうかと考えると、何も知らせないまま、今この時を安らかに過ごしている方がいい、と思ってしまう。

いつかは話さなければいけない事だと分かっているけど、キズキにはどうしても話せなかった。

でも、結んでしまったものは、簡単には解けない。結ぶのは簡単でも、解くのは難しい。結ぶ時は知られずに済んだとしても、解く時は知られずに済むわけがないのだ。

絆とはそういうもの。

いつの間にか結ばれているけれど、解かれる時は、その人自身との別れを意味している。

キズキはいつか話さなければ、とばかり考えていた。

「でも、どう言ったらいいの？」

他の《妖精》達は、もつと積極的に絆を結んで、その相手と一緒にいる。絆を結ぶ相手なんて、各々でまちまち。恋人同士もいれば、親友同士もいる。男女も関係なければ、年齢も関係ない。《妖精》がこの人と思った人に、一方的に絆を結んで成就する関係。それがこれ。

キズキはどうしたらいいか分からなかった。

絆を結んでしまった以上、解くには、カジカとの縁切りが必要になってしまう。けれど、そんなことキズキに出来るわけがない。

もう後に引けないのだ。

相手に知らせないまま時が過ぎたとしても、そのまま死ぬまでずっと絆の事を話さないというわけにもいかない。それでは、絆の意味がない。

だから、キズキはずっと悩んでいた。

話さなければ。

でも、どう切り出せばいいのだろうか？

MONOLOGUE【3】アリア

3 アリア

私が《魔女》に生まれたのは、私のせいじゃない。

けれど、《人間》は、私が《魔女》だって分かった瞬間、突然私と距離を置く。でも、それは、私のせいじゃない。私は何もしていない。でも、私が何もしていなくても、私以外の《魔女》が何かする度に、また、私のような《魔女》を持ち上げる《魔物》が何かする度に、私まで白い目で見られるようになる。

学校という環境は、そんな私にとって、最悪のものだった。

《魔女》は私だけじゃない。けれど、私以外の《魔女》達は、もっと器用に生きていた。どうして、私ばかりこんな目に会わなくてはいけないのだろう。どうして、私ばかり《人間》に辛く当られるのだろう。私は、学校という、小さな社会のルールに従って生活しているだけなのに、どうして、私ばかりが他の《魔女》にバカにされるのだろう。

私が欲しいのは、強い力でも、《魔物》達からの尊敬のまなざしでもない。ただ、平穩に過ごしていただだけ。放っておいてほしいだけ。欲を言えば、もっと好意的に接してほしいだけ。

でも、社会は私の味方じゃない。いつまでたっても、私はこの地獄から、抜け出せない。

どうしたら、ここから逃げられる？

その答えは学校をちゃんと卒業すること。……そう信じて生きてきたのに。ずっとそう信じて、いつか、この地獄は終わると信じて、一生懸命暮らしてきたのに、学校という場所から解放されても尚、私を取り巻く環境は変わりもしない。

どうしたら、ここから抜け出せる？

何が、元凶なの？

そんな時、私の前を、《妖精》が横切っていった。彼女が横切るのが悪い。こんな状態の私の前に、現れるのが悪い。だから、誰も私を責められはしない。

チャンスなんて誰にでもあつていいはずなのだから。

EPISODE【7】出会い頭

7 .

ぶつかってしまったのはキズキの方だった。

だけど、キズキの方が驚いていた。何故なら、傍に人がいるなんてぶつかるまで全く気付かなかったから。ぶつかってしまった女性^{ひと}は、少しも怒った様子もなく、笑って許してくれたけれど、その女性^{ひと}の目を見た瞬間、キズキは固まってしまった。

あまりに綺麗だった。どうしてこんなに綺麗なのか、分からないほど、綺麗だった。

そして、目が光っている。

すぐに逃げ出したくなるような、綺麗さだった。その女性^{ひと}は、キズキの目をじっと見つめ、ふっと笑みを深めた。

「あなた、《妖精》なのね」

この女性は、《魔女》だ。すぐに分かった。同時に、キズキは心細くなった。早くカジカの元へ帰りたい。カジカは待っているはずだ。ジュースを買いに行ったキズキを、ベンチで待っているはずだから、この場合は適当にして、早く逃げ出したかった。

「もう絆も結んでる」

この女性は、何者なのだろう。キズキはすごく、怖かった。

「私、アリア」

その女性が言った。

「あなたとは、また出会える気がするわ」

アリアと名乗ったその女性の言葉は、当たった。そもその話、このアリアという人と、キズキは何度もすれ違っていたかもしれない。関わるか、関わらないかの話で、今までも、何度もこの場所ですれ違っていただけなのかもしれない。

ともかく、キズキは、この日を境に、このアリアという女性とす

れ違つたびに、不気味さと不穩さに怯える事となるのだつた。

そんなこと、カジ力は気付かない、とキズキは思っていたけれど、それが何度も何度も繰り返されるうちに、カジ力はいつしか、アリアの存在に気付くようになっていた。

EPISODE【8】こわい夢

8 .

アリアによく出会うようになってから、キズキは街を歩くのが怖くなった。

カジカと一緒にいる時も、一緒にいない時も、何処かにアリアがいるのではないだろうか、と不安になった。けれど、アリアに話しかけられれば、キズキは無視できなかった。

そんな度胸もなかった。

カジカと一緒にいないときにアリアに出会ってしまった時は、キズキはどうにか別れられるようにいつも口実を考えていた。けれど、上手く逃れられない時もあった。それに、アリアの話術は、まるで魔法のように不思議と人を惹きつける力があって、キズキもいつの間にか、アリアの言葉に魅了されている事がしばしばであった。

特に、アリアがいつか、「私のこと、苦手でしょう？」と訊ねた時などは、キズキは心臓が止まるのではないかという程驚き、緊張したものだった。

こんなにアリアに対して苦手だと思うのは、きっと美しすぎるからだろうとキズキは納得していた。

今まで周りにいた者たちが美しくないというわけではなく、アリアの持つ美しさというものは、何処か特異的で、人の心に深く爪をたてるような猛々しさが潜んでいるようにキズキは思っていた。そのせいで、彼女のことを怖く感じている。そう思っていた。

だから、帰り道がてらにアリアに出会い、渡したいものがあるから、とそのままアリアの家に招かれた時、キズキは気が進まなかったけれども、断らずに行ってしまったのは仕方ないことだったかもしれない。

ともかく、キズキがアリアの家に上がり、その奥深くまで通された時には、事態はもう引き返せない所まで来ていた。

「知ってる？」

キズキがそれに気付いたのは、扉を背に立つアリアが、訊ねてきた時だった。

「絆って、上書き出来るのよ」

EPISODE【9】不正な絆

9 .

キズキは始め、アリアが何を言ったのか分からなかった。

けれど、言葉は段々とキズキの身体に浸透していつて、やがて、キズキの身体の底深くから震わせた。そして、絶望的なところに身を置かれているということを、キズキに思い知らせた。

アリアが詰め寄ってくる間、キズキは動けなかった。

《魔女》が目の前にいるのだ。《魔物》達に崇められる強い存在が詰め寄ってくるのだ。キズキに歯向かえるわけがない。それに、本来、この姿が通常なのだ。《妖精》が絆を結ぶ相手は、《魔女》が多い。《魔女》の強い気配に惹かれて、絆を結ぶのが普通だ。

だから、《妖精》がアリアに絆を結んだって、何もおかしくない。でも、キズキはもう絆を結んでいる。自分でこの人しかいないという人に、絆を結んだ後なのだ。それならば、とアリアは詰め寄ってきている。キズキは震えていた。自分では簡単に解けない絆。でも、アリアならば、簡単に解いてしまうのではないだろうか。

そんな不安が過った時、キズキはついにアリアに肩を掴まれた。「解かれない？ 解きたい？」

アリアが何を言っているか、今度は嫌という程よく分かった。自分で解くか、解かれるのを我慢するか。その二択しかない。

「やだ」

キズキは言った。

精一杯の拒絶だった。

「いやだ」

震えながらそう言う事だけが、今できる抵抗の全てだった。アリアの手に力が入っている。キズキの怯えは最高潮に達していた。

「そう」

アリアは静かに言った。

「解かれないのね」

《魔女》の手が、キズキの持つ絆の端にかかる。カジカにしつかりと結んだ絆の紐が、いとも簡単にアリアの手の中に収まってしまふ。キズキがいかにも嫌がったとしても、アリアはもう絆の紐を手放しはしないだろう。

アリアの優雅な微笑みが、キズキの心に突き刺さった。

「ゆっくり解いてあげる」

MONOLOGUE【4】ウルウ

4 ウルウ

僕が欲しかったのは、《妖精》なんかじゃない。

それなら何故、《妖精》なんかに関わったのか。理由は簡単。ただ、最高の力に近づきたかっただけ。それに、僕の尊敬する女性^{ひと}が興味を持ったからにすぎない。どうせ、《妖精》は《魔物》になんか心を開かない。むしろ、開かないで欲しい。本気じゃないのなら、関わらないで欲しい。絆を結ぶ気がないのなら、いつそ、関わらないで欲しい。

それが、すべての《魔物》の願いだと僕は思っている。

絆を結ぶ気のない《妖精》なんていらない。でも、最高の力は欲しかった。僕を最高の力に導くようなチャンスは欲しかった。僕の尊敬する女性が、幸せになれるような未来が欲しかった。そのためなら、そのために必要なら、僕は《妖精》を求める。

《妖精》の力を求める。

あの女性を導けるような力を、僕は求める。

だから、これは、僕の勝手。

あの女性のためになるのなら、あの女性の役に立てる僕になれるのなら、僕の耳には、もう《妖精》の悲鳴なんて、絆の持ち主の悲鳴なんて、全然聞こえない。怯えた顔も、怯えた声も、全て無いのと一緒に。相手が二人だろうと、三人だろうと、僕はあの女性のために、戦える。

だから、これは僕の勝手。

あの女性は悪くない。

すべては《魔物》がいけないんだ。《魔女》として苦しんできたあの女性は無関係ない。すべては《魔物》である僕がいけないんだ。

恨むなら、僕を恨めばいい。

僕を恨んでくれればいい。

これは、僕の勝手なのだから。

これは、僕の罪なのだから。

覚悟を決めた僕の前では、《妖精》の悲鳴なんて、《人間》の嘆きなんて、無意味だった。

EPISODE【10】知り合う

10 .

キズキが変だ。

カジカはすぐに気付いた。いつからだろう。それは分からない。だけど、段々と、キズキの様子がおかしくなってきた事に、カジカは気付いていた。

キズキの様子がおかしくなるのは、いつ？

カジカはそれにも気付いていた。キズキの様子がおかしい時、決まってその目線の先にいる女性の姿。カジカは気付いていた。静かに微笑む彼女が、キズキを狂わせている。でも、どうしてだろう、彼女は何者なのだろう。

それは、カジカには分からなかった。

彼女が話しかけてくるまでは。

「あなた達、よくここにいるのね」

彼女はカジカから見ても、美しい人だった。

光のような美しい人。だけど、その美しさの中に潜むのは、《魔女》の心。カジカにもすぐに分かった。けれど、《魔女》だからといって、キズキがここまで怖がるということは考えられなかった。キズキはたしかに進んで他人と関わるタイプではないけれど、ここまで極端に怖がるというのはよっぽどだ。

「私、アリア。そこにいるキズキとは、たまに会うのよ」

——知り合い？

カジカはキズキを見つめた。だけど、キズキはキズキで一杯いっぱいのようなだった。アリアと名乗る女性に見つめられて、キズキは明らかに怯えている。ただの知り合い。そう見えるわけがなかった。だけど、どうしてキズキはこんなに怖がっているのだろう。

カジカはまだ分からなかった。

「あなたの名前は？」

アリアに訊ねられ、カジカは反射的に答えた。

「カジカ」

名乗った瞬間、キズキが震えたのが分かったけれど、もう遅かった。

アリアはにっこりと微笑んで、首を傾げた。

「そう、カジカ。あなたとも、また会えるでしょうね」

そう言って、アリアは去っていった。

EPISODE【11】絆の告白

11.

キズキは決心した。

カジカに絆についての告白をすること。その結果、どんな未来に結びついたとしても、後悔しないという事を。アリアが現れてから、カジカにもはつきりと異変に気付かれてしまったという事は、キズキにも分かっていた。だから、まずは告白をすること、それが大事だと思った。

でも、やはり怖かった。

一番いいと思っている方法は、キズキがそつとカジカの前からいなくなる事。そうすれば、カジカを巻き込むことにもならない。その事もよく分かっていた。

けれど、出来なかった。

何故なら、カジカと別れたくないという気持ちが強すぎるから。この気持ちをどうしても抑えられなかった。身勝手な理由だと分かっている、抑えよう、抑えようと必死になっってみても、どうしても駄目だった。抑えようとすればするほど、気持ちは増幅し、自分ではどうすることも出来なかった。

キズキはそれほどまでに、カジカの事が好きだった。

友情とも愛情とも何か違うこの気持ち。

《妖精》が絆を結んだ相手に感じる、特別な感情。

それを、キズキ独りではコントロールできなかった。

「カジカ、聞いて」

だから、キズキは決心した。

「言わなきゃいけないことが、あるの」

全ての恐れを抑え込んで、全ての震えを殺して、キズキは少しずつ

つ、少しずつ、焦らずに、言葉を選びながら、カジカに話を切り出した。

カジカはどう思うだろうか。これからどうなっていくのだろうか。それを不安に思っ何も出来なかった自分が、カジカの目にどう映るのだろうか。

キズキには、全てが怖かった。

逃げ出したいほど、怖かった。

でも、姿を見せかけたためらいの心をぐつと握りつぶしてしまうと、キズキはやっと『告白』を始めた。

EPISODE【12】追跡の音

12 .

キズキの告白は、カジカの胸に重く押し掛かった。

短いけれども長く感じたその告白に、カジカは何と言っていいのかわからなかった。その後、どうやって別れたのかも、その時のキズキがどんな表情をしていたかも、カジカは覚えていられなかった。キズキがどうして自分を選んだのか、カジカは悩んだ。カジカには自信がなかった。自分が《妖精》に絆を結ばれるに値する人物なのか、自分でも疑わしかった。

なぜなら、自分の心は、《人間》なのだから。

カジカが引つかかっていたのは、心だった。

友人としてのキズキ、《妖精》としてのキズキ、ありのままのキズキ、カジカがキズキに愛情を持っていたのは確かだ。けれど、絆を結んでくれたキズキをどう捉えていいのかが、わからなかった。絆を結ばれたことで、どう接すればいいのかわからなくなってしまった。

今まで通りにはとても出来ない。今まで通りでいいのかすらも分からない。だから、カジカの心が整理されるまで、まだ時間がかかりそうだった。

でも、キズキを失いたくはない。

キズキがいなくなってしまうのは嫌だった。

「キズキ……」

カジカは暗くなった空を見上げては、呟いた。

「どうしてわたしなの？」

絆を結んでくれたキズキ。

それをどう位置付ければいいのか、カジカにはまだわからなかつ

た。

「わたしには、守れないよ」

アリアの顔がキズキのイメージに重なる。彼女が近づいて来た理由が、何となくわかった。考えている事が正しければ、カジカはアリアにとって、邪魔な存在だろう。そして、キズキはアリアを恐れている。

「わたしには、守れない」

カジカには勇気が持てなかった。

しかし、その勇気の誕生を待たずして、運命の歯車は狂いだした。ウルウと名乗る青年が、カジカの前に現れた時に。

MONOLOGUE【5】マジリコ

5 マジリコ

また、嘆きの声が聞こえてきた。

わたしにもっとも近い人達が、また、犠牲になった。わたしはあの声を何度も聞いている。何度も聞きながら、涙を流している。けれど、泣いても、泣いても、声は止むことを知らず、泣いても、泣いても、何処かで誰かが悲鳴をあげる。

《妖精》の心を持ったせいで、彼らは悲鳴をあげる事になる。いや、それは違う。

《妖精》に生まれただけだったら、彼らが悲鳴をあげる事もなかった。

じゃあ、どうして？

どうして彼らは悲鳴をあげなくてはいけない？

どうして、わたしが最高の力を授けた人数の何十倍、何百倍もの《妖精》が悲鳴をあげなくてはならないのだろう。

絆を結んだ者も、まだ結んでいない者も、結ばれた者も、結ばれるはずだった者も、どうして、わたしに出会う前に、不幸になってしまふのだろう。どうして、わたしに出会わせる前に、不幸にしてしまふのだろう。

『彼ら』を守護する者はいないのだろうか。

『彼ら』を教え諭す者はいないのだろうか。

わたしの前に、これ以上嘆きをもたらさないで欲しい。わたしの前に、これ以上悲鳴をもたらさないで欲しい。この気持ちを、誰に伝えればいいのか。何処に訴えればいいのか。

それが分からないわたしは、詩を歌う。

全ての者に対して、詩を歌う。

世界全体に対して、詩を歌う。

それが、わたしの出来る唯一の罪滅ぼし。わたしの思いつける極小さな罪滅ぼし。

詩がわたしの口から飛び出して、世界に羽ばたいて行った後、それを目にする人々に、少しでも想いが伝わりますように。

わたしは願ひ続けた。

EPISODE【13】慕情の末

13 .

キズキが振り向いた時、そこには確かに人がいた。同じ年頃の、静かな面持ちの青年。そして、一目見ただけで判る、《魔物》の心。ぞっとした。

見知った顔ではないのに、馴染みの雰囲気ではないのに、その青年から感じる気配は、明らかな殺気に満ち溢れていたのだから。

「《妖精》」

青年が唐突に言葉を発した。

「お前だ」

キズキには意味が分からない。けれど、青年の並々ならぬ雰囲気、蹴落とされたキズキは、青年が間近に迫ってくるまで、少しも動くことが出来なかった。

肩に手を置かれてから、キズキはやっと、今、何をすべきなのかを思い知った。それでも、青年の不気味なほど澄み過ぎた目を見つめたまま動けないでいたのは、声が出る前に恐怖で枯れてしまった事と、足に力が入らず、動けなかった事のせいだった。

立っていられる事自体が不思議なくらい、キズキは動けなかった。「お前、アリアを知ってるね？」

青年が口にした言葉に、キズキはますます不安になった。この青年は、アリアを知っている。アリアの知り合いだろうか。アリアの差し金だろうか。差し金であろうとそうでなかつと、アリアに関わりのある人物だということは明らかだ。

——逃げなきゃ。

キズキは直感的にそう思った。

青年の醸し出す殺気、そして、アリアという言葉。逃げたくなる

理由は、それだけで十分なほどだった。そして、キズキの直感には、狂い無かった。

でも、青年の次の言葉に、キズキの直感の声はかき消されてしまった。

「アリアが言ってた。カジカっていう娘の事」

それは、直感だけでなく、キズキの冷静さまでも吹き飛ばしてしまった。

「どういうこと？ カジカが何？」

「……それは、行きながら教える。急いで」

青年の表情も、雰囲気も、今のキズキには見えない。

EPISODE【14】こわれる

14 .

——騙された。

キズキがそう気付いた時は、かなり遅い段階だった。何故なら、キズキが事態を把握する前に、意識が飛んでしまい、再び目が覚めた時は、もはや自分がどこにいるかも分からないほど混乱していたのだから。

それでもやつとキズキが青年に騙されたという事に気付けたのは、綺麗な目をした青年が動けないキズキの前に再び現れたからだった。「具合は悪くない？」

青年が優しく問いかけてくる。

しかし、その表情の下には、隠されもしない残酷な感情がはつきりと表れていた。

「どうして？」

キズキは嘆いた。

青年の《魔物》の心、その不気味なほど澄んだ、無垢の心に、嘆いた。

「どうして？」

「アリアのため」

当然のような答え。

キズキも分かってはいた。何故、彼がアリアの名前を出したのか、その意味が何なのか。

この《魔物》は、アリアの使い魔だったのだ。

アリアに心を囚われている、哀れな無垢の《魔物》なのだ。

「あたしを」

キズキは知りたくもなかった。自分がこれからどうなるのか。彼

が自分をどうするつもりなのか。

しかし、何でも知りたがる欲求というものは、願望や想いとは別に働くこともあるのだらう。

「どうするつもり？」

キズキの口から言葉が放たれた瞬間、この場の空気が一気に冷めていった。

青年の表情は変わっていない。

けれど、放たれた声は、少しだけ、様子が変わっていた。

「君は僕になる」

青年がにこりと笑う。

「この僕、ウルウになるんだ」

その時やっと、キズキは気付いた。

ウルウと名乗ったこの青年の左手にて輝いている、美しいナイフの存在に。

「だから、カジカとは、お別れだよ」

EPISODE【15】のぼって

15 .

カジカも、キズキも、ウルウを前に、気付いたことがあった。

一つは、確かな絶望。もうお互い、会えることもないだろうという絶望。もう一つは、慕情。ウルウを鏡にして映る、自分達の姿。誰かを慕い、慕い、慕いつくして、その結果に走る狂乱の沙汰。キズキを失いたくない。

カジカを失いたくない。

二人のこの気持ちが強ければ強くなるほど、想いのエネルギーは人のコントロールから外れ、暴走し、心の凶器となってしまう。

ウルウがこんな事をするのも、その凶器を扱うのではなく、逆に操られてしまった結果なのだろう。二人とも、そう考えていた。

「さよなら」

「さよなら」

カジカとキズキ。時間と空間を隔てて、二人は別れを告げる。けれど、これが永久の別れになるという恐れは、二人とも感じてはいなかった。

きっと、ウルウには見えていなかっただろう。

カジカとキズキの表情が。

二人に繋がっている、絆というものが。

きっと、ウルウには分からなかっただろう。

絆というものの、それ自体の意味が。

「キズキ」

「カジカ」

二人の想いは身体を離れ、互いに呼び寄せ会いながら、やがて結びつく。

ウルウがキズキの肉体を喰らったとしても、カジカの魂を破り千切ったとしても、この想いだけは捕えることは出来ないだろう。ウルウがいくら追いかけても、アリアの強力な魔力があつたとしても、この二人の結びつきだけは、壊すことはできないだろう。

結びついた二人の想いは、炎のように揺らめきながら、昇って、昇って――。

誰の手にも触れられない場所を目指しながら、昇って、昇って――。

互いの名を呼び合いながら、互いの絆を確かめ合いながら、昇って、昇って――。

そして、消えていった。

EPILOGUE

「さがさないで。
みつけないで。
とらえないで。
ころさないで」

全能でもないわたしが幾らこう叫んだところで、世界は少しも変わったりしない。そんなわたしなのに、世界の人々はわたしを呼ぼうとする。

「ちからがほしい。
えいちがほしい。
めいよがほしい。
いのちがほしい」

欲求に支配された人々は、わたしにそう訴えてくる。人々に最高の力を授けるわたしの能力に、そんな希望や夢を抱く。でも、最高の力がもたらすものなんて、一つしかない。

「安息と平穏を」

何もないという力が、持ち主の心を安らかにする。
ただそれだけの力。
ただそれだけの事。

だから、わたしは世界に訴える。

「さがさないでください。
みつけないでください。
とらえないでください。
ころさないでください」

それを守る者に、《無》の力を授けようと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1072m/>

Magirico

2010年10月8日14時34分発行